


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 5 月 12 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	榊原 香鈴美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
韓国・濟州島	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
韓国濟州島周辺海域に生息するミナミハンドウイルカの個体識別調査、および水中行動予備観察	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 27 年 4 月 29 日 ~ 平成 27 年 5 月 5 日 (7 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
Ms. Soojin Jang (Ph.D student of Ewha Womans University) , Dr. Byung-Yup Kim (Professor of Jeju National University)	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
<概要>	
<p>今回は、濟州島周辺に生息するミナミハンドウイルカの個体情報の収集と、水中遊泳者に対する行動を観察する目的で渡航した。実際の調査では、天候不良により船が欠航したため、陸上から観察を行った。陸上からのみの観察ではあったが、調査可能であった 4 日間中約 30 時間の目視調査により、6 回イルカの群れを発見し、約 5 時間半の観察を行うことができた。また、この機会を得て、現地で対象種の研究を行う Jeju National University の Byung-Yup Kim 教授と Ewha university の大学院生 Soojin Jang に直接会い、現地での調査の現状と今後の計画を伺うことができた。これにより、遅くとも 2016 年度より開始予定の個体識別調査の補助と、水中映像とデータの共有を条件にデータ使用の許可をいただくことができた。これらの様子から、韓国濟州島における水中行動観察は可能であると判断できる。今後は、Kim 教授 と Soojin さんと共同で個体識別調査を行いながら、水中で遊泳者（観光者）との遭遇機会が少ない個体群における、遊泳者への探索的な行動を観察する予定である。修士研究で対象としていた遊泳者馴れした御蔵島野生イルカ個体群と比較するとともに、遊泳者への探索的な行動の性差に注目し行動の機能を明らかにする。次回以降の調査に関しては、指導教官と話し合った上で計画を実行していく。</p>	
<内容>	
調査方法と調査努力量	
<p>滞在地の Cheju 市内の Gwandeok より車で 30 分ほど行くと海外線につき、そこから海岸沿いの道路を走りながらイルカの群れを探した。現地で観察を行う学生より、島の北西側が比較的追跡しやすいという情報を得たため、4/30、5/1、5/2 は北部から西廻りに、5/4 のみ、東廻りに調査を行った (図 1)。4/30 から 3 日間、北西部でイルカの群れを発見し、追跡することができた。当初の予定では、発見後船を出向させ、水中での行動観察にうつる予定であったが、強風と濃霧の影響により船を出すことができなかった。</p>	
	
<p>図 1. 調査ルート 水色:4/30, 青:5/1, 黄緑:5/2, 赤:5/4</p>	
観察結果	
<p>発見したイルカはすべて群れを形成しており、最小 5 頭、最大 20 頭以上の個体数を観察することができた (写真 1)。岸からイルカの群れまでの距離をレーザー距離計で計測した結果、およそ 130m の距離範囲内にあることがわかった。複数頭が同方向に比較的速いスピード、かつ短い呼吸間隔で遊泳する移動の様子や、呼吸間隔が長くゆったりとしたスピードで遊泳する休息の様子を観察することができた。また、個体が空中にジャンプをする様子を何度も観察した (写真 2)。同種の御蔵島個体群ではジャンプの事例が少ないため行動の違いを感じた。イルカ発見時には、岸から釣りをおこなう人や漁をおこなう海女も確認できたが、それらをイルカが回避するような様子はみられなかった (写真 3)。また、大きな貨物船が群れの近くを通過することもあったが、その際にも行動の変化はみられなかった。</p>	
<p><平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org</p>	

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真1. 複数頭のイルカ



写真2. ジャンプするイルカ



写真3. 釣り人の目の前を通過するイルカ

渡航成果

濟州島周辺海域に生息するミナミハンドウイルカを対象に観察をしている Ewha 大学の Ms. Soojin の調査に同行することで、現地の調査体制を知ることができた。また現在までの調査の過程と今後の予定についてもうかがった。今後自身が観察をおこなう上で重要な情報として、遊泳禁止区間や調査に使う船の出航可能な港、船の依頼方法を把握した。可能な限り迅速に開始する予定である水中観察による個体識別への協力(主に、水中映像の撮影方法や個体識別方法などの技術伝達)と、自身の観察に必要な水中映像記録の利用許可もいただいた。

今後の予定

主には、水中機材の利用方法や水中での個体識別方法など、技術伝達と調査人員の補充をおこなう形で参加していく。可能であるならば、自身の研究課題に合わせた観察方法で水中映像を撮影してもらおう。また、何度か渡航し自身で予備観察データとして試験的に水中映像を蓄積していく。個体情報、特に性・成長段階の情報が十分にそろえることを最初の目的として調査を開始する予定である。

6. その他 (特記事項など)

今回の渡航は、2014 年度 PWS 年次シンポジウムでご講演いただいた Professor Jae C. Choe の紹介にはじまり、実現することができました。Jae 教授をはじめ、シンポジウムに先生を招聘してくださいました PRI の松沢哲郎教授、Jae 教授との仲をとりもち、渡航に際し激励をくださった友永雅樹教授に熱く御礼申し上げます。渡航申請への迅速な対応とともに、複数名の調査員による渡航を快く承諾・ご支援いただいた幸島司郎教授に、心より感謝の意を表します。最後になりましたが、現地での調査や生活でお世話になった Soojin さんと Kim 教授には感謝の気持ちをもって、今後共同研究者として協力していきます。